KANSAI＊OSAKA

文化力

No.126
2017/SPRING・春

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

特集・座談会
「分断の世紀」をどう生きるか
近藤誠一氏 エバレット・ブラウン氏 松山大耕氏 堀井良殷

水都を寿ぐ「交響楽 能」
2020文化プログラムを目指して

平成29年度助成先決定
日本万国博覧会記念基金
アーツサポート関西

アート・アセンブリー 中村壱太郎×佐々木美智子バレエ団
平成28年度大阪文化祭賞、関西元気文化圏賞 受賞者贈呈式

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会

エバレット・ブラウン氏
（国際フォトジャーナリスト、日本文化研究家）

「分断の世紀」をどう生きるか

紛争やテロ、環境破壊など、世界情勢は混迷を極めている。社会で分断が起こる背景には、これまでリベラル・デモクラシーを支えてきた中間層が衰退し、「格差社会」を招いたことがある。大衆の不満はポピュリズムを生み、反グローバリズムや保護主義が席巻、これまで世界を支えてきた欧米型の資本主義・民主主義は機能不全に陥った。こうした試練を乗り越えて行く力は「文化」にある。多様性を包摂する日本文化や寛容の心を広く普及し、世界の安定と発展に貢献する時である。

当協会が2014年に承継した「日本万国博覧会記念基金事業」では、基金の運用益でこれまでに日本を含め110か国に約4,400件、総額190億円もの助成を行い、日本文化や精神を普及してきた。この座談会では、グローバルな視点から日本人の精神に想いを寄せる識者の皆さまに、今日をいかに生き、世界平和に貢献できるのかについてご意見を伺った。

堀井良殷（司会）
関西・大阪21世紀協会
理事長

エバレット・ブラウン氏
国際フォトジャーナリスト
日本文化研究家

近藤誠一氏
近藤文化・外交研究所代表
元文化庁長官

松山大耕氏
臨済宗 妙心寺 退蔵院
副住職

（50音順）

世界の現状をどう見るか

堀井　1970年に大阪で開催された日本万国博覧会は、その「開催の意図※」に記されているように、「世界にはさまざまな文明が多元的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にこそ進歩が望まれるべき」という理念のもと開催されました。当時から50年近く経った今も、この理念は少しも色あせることなく、今の危機的な世界情勢を先見していた先人の知恵と志に改めて敬意を覚えます。

そして昨年は、まさにイギリスやアメリカで既存の政治に失望した民衆の不満がポピュリズムや反グローバリズムを生み、人類の将来への不安が増大しています。写真家としてアメリカから日本に移り住んで30年近くになるブラウンさんは、こうした情勢をどのように見ておられますか。

ブラウン　この度のアメリカの大統領選挙の結果には、正直、驚きと失望を感じました。これはアメリカに限らず世界的な傾向です。人類は本当に進歩しているのかと思いました。こうした中で日本人は、自分たちが持っている多様性や柔軟性をもっと意識して、文化の力を生かして世界に臨めばいいと思います。

堀井　今、世界各地で起きている紛争は、宗教の違いが原因の一つになっているようにも思います。松山さんは、宗教家としてダボス会議をはじめとした世界的な集まりの場で日本人の心を伝えられていますが、紛争の絶えない世界情勢をどのように見ておられますか。

松山　宗教が分断の原因の一つだというご指摘は否めません。昨年、イタリアで開催されたローマ教皇主催の宗教者会でも、この問題が議論されました。5年前の同会では、イスラム教の指導者から、「ジハードとは自分の怠け心を戒める意味であり、コーランには異なる宗教の人をイスラム教に従わせたり、ましてや殺してもいいという教えはない」とも聞きました。

すべての宗教の役割は「不安を和らげる」の一言に尽きます。だから宗教を戦争の理由にするのは、宗教の役割とは正反対。争いが生まれるのは、二元論で物事を判断するからではないでしょうか。白か黒、善か悪という考えで物事を見ると、どうしても対立の構図になります。

仏教には、物事を二つに分けて見てはならないという「不二（ふに）」の言葉があります。物事は白と黒に分かれている

※「日本万国博覧会 公式記録（1972年）」より「開催の意図」（抜粋）
「・・・日本万国博がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多元的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にこそ進歩が望まれなければならない、という『調和的発展』の精神であった。これは東洋思想の『和』の心を現代世界に呼戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものであった。」

のではなく、オセロの駒のように表裏一体なのです。お地蔵さまは閻魔さまの化身とされ、コインの裏表と同じ。私は日本人の宗教家として、「物事を二元論で見てはならない」ということを、とくに広めたいと思っています。不二の見方が世界に広まれば、もう少し本当の意味での平和が達成できるのではないでしょうか。

堀井　近藤さんは、一昨年の「関西・大阪文化力会議2015」の基調講演で、「人類はリベラル・デモクラシーを導入したことで、平和と繁栄は恒久的に約束されたと思っていたが、近年、世界各国でそれが機能していない」と指摘されました。その言葉の通り、リベラル・デモクラシーの手本たるイギリスやアメリカで、今まさにそれを否定するような事態が起きています。

近藤　今日の科学技術や民主主義、自由経済の発達は、デカルトの物心二元論をベースに西洋が3～400年かけて培ってきた近代合理主義精神の賜です。しかしそれは、合理性や効率、正義といった理性を偏重し、人間が本来持っている感情や感性を置き去りにし、得てきたものです。今にいたってそのギャップが顕在化し、「アメリカンドリームだといわれて努力すれば報われると教わってきたが、金持ちは金持ちのままで、俺たちはいくら頑張っても暮らしは良くならない」とか、「移民のせいで自分たちの職がない。正義だの民主主義だの、きれいごとはたくさんだ。俺たちの生活をどうしてくれるのか」などと民衆の不満が一気に噴出しています。西洋の合理主義に振り子が振れて極端な貧富や社会格差が生まれた結果、今また振り子が戻りはじめているんですね。先進国のエリートが押し付けてきた価値観、すなわち感情より理性を重視する生き方に、大多数の民衆はついていけないのです。

　一方、日本人には、物事を白か黒で決着させるような二元論ではなく、曖昧なもの、多様なものを受け入れながらバランスを保って生きて行こうとする知恵や文化があります。これは日本人が自然に学んで生きてきたことにも起因しているでしょう。厳しい冬に耐えた後は必ず暖かい春が来て、草木萌える夏となり、実りの秋を迎える。時には自然災害に悩まされながらも、人々は心の安らかさを保ち、少々のことは我慢して争いを避けようとする和の心を培ってきました。また、島国であることも幸いして他民族から侵略を受けることなく、そうした精神的な価値観が打ち壊されずに営々と培われてきました。

　実は、私は長い外務省勤めの中で、国際政治と文化は異質なものだと思っていました。しかし今、こうした日本人の精神文化こそが、世界の諸問題を解決する上で役立つのではないかと思っています。

ブラウン　こうした日本の精神文化の基礎が何であるのかをもっと議論するべきだと思います。例えば、日本は大陸と違って安全でおいしい水が豊富にあります。地中からは温泉も湧き出ます。一方、地震や台風といった自然災害も多い。日本人はそういう自然の恵みと恐ろしさの両方を受け入れ、柔軟に対応して生きてきました。

堀井　私はかつて外国人のホームパーティーで「Tea or coffee？」と聞かれ、忙しく立ち振る舞っている奥さんを気遣って「どちらでもいいですよ」と答えたら、「はっきりしてくれ」と怒られた経験があります。私たち日本人は、外国人から「曖昧で何を考えているか分からない」といわれ、それをコンプレックスのように感じてきましたが、近藤さんがおっしゃったように、実はその曖昧さこそ大切なんですね。今、それを胸を張っていえる時代になり、いよいよ私たちの出番だという気がしてきました。

「being」を求める旅

堀井　物事を二元論で判断するのではなく、多様性を受容し、寛容さを大事にする日本人の精神文化を、どのようにすればもっと世界に発信できるでしょうか。

ブラウン　ひとつは観光です。私の実体験でもありますが、日本に来る外国人旅行者は、日本人と接するだけで安らぎを感じます。とくに地方の町でお年寄りに出会って話しをすると、なぜか心が安らぎます。古き良き日本の精神性を受け継いでおられるからでしょうか。そうした日本で感じる安らぎは、貴重な観光資源だと思います。

　今、アメリカがトランプ政権になって、日本の観光事業はチャンスを迎えたと言えるでしょう。国内の政治的混乱に疲れたアメリカ人が、心の癒しを求めて日本にやってくるからです。また、日本の仏教も中国人の間で流行していることに注目したいです。

松山　昔は観光の目的といえば「seeing」でした。例えば京都だと、寺や神社などを見て巡るといったものです。それが最近は、舞妓さんの衣裳を着て街を歩いてみたり、和菓子作りを体験してみるといった「doing」に変わってきました。私は、今やさらに進んで「being」、すなわち物事の本質や精神性を求めているように思います。自分は何のために生きているのか、何のために仕事をするのかといった哲学や理念を、旅の中で見出そうという人が増えているんですね。そして、そういう思いは人と心を触れ合うことでより強く体感できます。私の寺にも、会社が休みのたびにスウェーデンからやってくる社長さんがおられ、幹部社員と一緒に座禅や庭掃除をして帰られることもあります。これこそ「being」で、寺の仕事に触れることで、心のお土産を持って帰られるのです。

　そもそも「観光」の「観」は、心で観るという意味がありますからね。こうした体験をSNSや口コミで伝えてもらうというのは、世界発信としては一見地味ですが、長い目で見ると非常に効果的だと思います。つい最近、アメリカ在住のユダヤ人で、パレスチナ人のイスラム教徒と旅行会社を共同経営している人と話したところ、「日本人の宗教観は世界でも特異だ。ぜひそれを知らしめたい」とおっしゃっていました。

堀井　「seeing」から「doing」、そして「being」になってくるという松山さんのお話は、今後の観光政策に対する貴重なご示唆だと思います。今や日本人であること自体がブランドに

なっている。日本人の生き方そのものが、クールジャパンだといっていい。

近藤　それを分かってもらうには、実際に日本に来てもらって、日本の自然に触れ、日本人の生活を体験し、日本人と話をして感じてもらうことが一番です。いくら言葉を尽くして左脳に訴えても、右脳で感じなければ心から理解したとはいえませんからね。

かつて外務省がインドネシアの「プサントレン」というイスラム教の高校の先生10名を日本に招待し、2週間ほどかけて寺や高校の理科実験室などを見てもらったことがありました。そして帰途につくとき、団長の校長先生が「日本は色々と面白かったが、中でも一番感動したのは比叡山だった。比叡山を歩いていると、ここには神々が宿っているようで、ここにこそ日本人の魂の原点があるような気がした」と話されました。私は、一神教であるイスラム教の国の人が「神々」と複数形でいわれたことに驚くとともに、比叡山という「場」が日本人の心を彼らに理解させたことが、強く印象に残っています。こうした経験から、私は、観光とは日本人の心を感じてもらう交流だと思っています。

日本人の強みを示す

堀井　日本人は伝統的に多神教の宗教観を持っていますが、明治維新の折、政府は廃仏毀釈※を行って国家神道に統一しようとしました。西欧のような一神教こそ先進国の証だというコンプレックスがあったのかもしれませんが、今は逆に日本人の宗教観が注目されているのですね。

※明治初年、祭政一致をスローガンとする政府の神道国教化政策・神仏分離政策によってひきおこされた仏教排斥運動。

近藤　明治憲法を作るにあたって伊藤博文は、西欧がキリスト教でまとまっているように、日本も精神的な拠り所となる神様をひとつにして国民の心をまとめないと西欧に征服されてしまうと考えたようです。多神教は遅れていて、一神教が進んでいるというコンプレックスもあったかもしれませんが、それ以上に、短期間で富国強兵を果たし西欧列強に勝つには、一神教による「正か邪か」という二元論が便利だと考えられたのだと伺ったことがあります。

ブラウン　当時はそういう考えも必要だったでしょうが、もともと日本人には神仏習合という総括的な見方がありました。これからの時代は、他宗教の人や異なる文化を受け入れることができる日本人の力は大きな強みとなるでしょう。日本人自身がそれに気づき、そうした力を取り戻す必要があります。

堀井　そうした日本人の国民性は、海外の宗教者にも通じているのでしょうか。

松山　地理的、歴史的バックグラウンドがない国で言っても、なかなか通じませんね。最近は日本の仏教を実践している欧米人もたくさんおられますが、そうした外国人のお坊さんより、日本人のキリスト教の牧師さんやイスラム教のイマム（指導者）の方が話が合うことが多い。例えばドイツに行って、日本の仏教をしているドイツ人のお坊さんに、「キリスト教やイスラム教の皆さんと一緒に会議をしよう」ともちかけると、「私たちはキリスト教もイスラム教も嫌だから日本の仏教をしているのに、そういう人たちと同席するのはご免だ」と断られたこともありました。日本人のお坊さんや牧師さん、イマムはほとんどそんなことをいいません。つまり、宗教以前に国民性の問題で、自分が生まれ育った国の文化や考え方は、宗教という器の話ではなく、刷り込まれてきたものなのです。

感性豊かな人を呼び込む

堀井　これまで日本が世界に貢献するためには外国に行って何かをすることばかり考えていましたが、皆さんのお話を伺って、外国の人に来ていただき日本を理解してもらうことも大きな貢献であるということに気づかされました。では、日本に来てもらった人たちに対して、具体的にどのようなアクションを起こせばいいのでしょうか。当協会は万博記念基金をそうした活動に活かしたいと思っています。

近藤　アーティスト・イン・レジデンス事業*への支援が考えられますね。歴史的建造物や文化財、自然の多い日本の環境は、感受性の強いアーティストにとってインスピレーションの宝庫だといえるでしょう。若いアーティストを招いて、そうした日本の良さを伸び伸びと感じてもらい、作品づくりに活かしてもらう。そして、そうい人たちが自分の国に帰って、日本で感じた日本人の精神性や自然観を広めてもらうのです。例えばポール・クローデル（1868～1955）というフランス人の作家は、1921年に駐日フランス大使として来日して日本が好きになり、その素晴らしさを世界に発信してくれました。

*アーティストを招聘するにあたって、一定期間滞在しながら作品を制作する事業。Artist-in-residence program。

ブラウン　1980年代にJETプログム*が立ち上げられ、世界各国の若い人たちを日本に呼び、英語の指導や国際交流に従事してもらいました。これは日本ファンの外国人を育てるのに非常に効果的でした。近藤さんがおっしゃったように、発信力のある感性豊かな外国人を呼び寄せ、そういう人たちを介して日本のことを世界に発信することはとても重要だと思います。

また、そういう外国人は、日本人にとっては自分を映す鏡にもなるでしょう。外国人の感性を通して、日本を見直す機会にもなります。日本が文化・芸術立国となるためにも、国際的な文化交流プログラムを意識的に増やしていくことが重要になるでしょう。

*地方公共団体が外務省や文部科学省などの協力のもとで推進する外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）。外国語指導助手、国際交流員、スポーツ国際交流員の3職種に分けられ、小・中・高校や地方公共団体の国際交流担当部局などに配属された。

松山　ダボス会議に行って、いろんな方々とお会いしました。その中にはとてもお金持ちの方もたくさんおられました。そうし

た人の話を聞くと、世界各地のさまざまなNPOの活動を支援するために寄付をしても、なかには多額の寄付を受けたために利権や妬みが生じ、せっかくの活動がうまくいかなくなってしまうこともあるようです。必要なところに必要なお金を行き渡らせることは大事なのですが、それは非常に難しい。それよりも活動の広報を手伝うほうがよい場合もあります。

今やYouTubeなどで世界中に映像や音声を発信できますし、双方向ですから反響もすぐ分かる。だからクオリティーの高いコンテンツを作って反響を高めるために、感性に優れたアーティストを日本に呼び寄せるのもいいし、日本人のクリエーターが携わってもいいでしょう。そして「こんな素晴らしい活動をしている人たちがいる」「こんな素晴らしい場所がある」ということを広く知ってもらえば、本当の意味でその団体や個人を支援したいとか、行ってみたいと思う人も増えてくると思います。

近藤　万博記念基金事業として、世界で活躍しているNPO団体や、日本の文化の良さを発信している人を褒賞してはどうでしょうか。お金ではなく、名誉を与えるのです。あるいはそういう活動をしている人を集めてシンポジウムなどを開き、活動をしている人たちの声を伝える媒体になってあげるのもいいでしょう。

堀井　ある大学の教授と話したことですが、アメリカでもヨーロッパでも、大学で日本文化を研究している若い研究者がたくさんいるそうです。そうした若い指導者や准教授、講師クラスの人を日本に招いて日本の文化や精神性に触れてもらい、それを自分の大学に戻って学生たちに伝えてもらう。そういうプログラムも有効ではないかとのことでした。

ブラウン　私の視点は少し違います。そうした先生たちは日本に対する知識や自分の世界観をお持ちでしょうから、むしろ日本に対するイメージや先入観のない若い芸術家やクリエーターのほうが、日本で受ける衝撃は新鮮で強いと思います。また、今や発信力がとても重要ですから、日本で感じたことをしっかり発信できる人がいいですね。

松山　私は、日本には世界の潮流とは全く違う価値観があることを知ってもらいたいと思っています。例えば、現在のビジネス界は短期間に高成長とグローバル化を遂げることに最高の価値を見出しますが、京都ではそうしたことはあまり評価されません。どれだけ長く事業を続けているか、京都の町や文化にどれだけ貢献しているかで企業のステイタスが決まるのです。西利という京漬物の老舗企業の社長さんがおっしゃっていましたが、東京で会議の後に懇親会があると、規模の大きな会社ほど上座に案内されるそうです。しかし京都では、京都の町に対する貢献度を基準にして席順が決められます。小さな会社でも、祇園祭で役員をしていたり、町の振興に貢献していればステイタスは高いのです。また、京都にある企業の4～5%が100年以上続いています。

こうした話をアメリカのビジネススクールの学生さんたちにすると、京都には高成長やグローバル化とは別次元の価値観があることを知って、皆さんとても驚き、感心されます。これも心のお土産ですね。このように日本に来て初めて分かる違いをしっかりとした形で伝える努力が、将来の日本のプレゼンス（存在感）を高めるのだと思います。

匠の心と技を世界へ

近藤　成果至上主義はビジネスの基本ですが、私は自己の目標に向かって努力する過程も重視すべきだと思います。

剣道や柔道が、礼に始まり礼に終わるのは、お互いにここまでしてきた努力に対して敬意を払っているからです。努力のプロセスを讃えず結果しか見ないのでは、人間の心を軽視していると思います。剣道界がオリンピック種目に名乗りを上げないのは、メダル争いの競技にしたくないからだと聞きました。

また、源氏物語のような古典文学を原文で読もうとすると、とても骨が折れます。しかし、辞書を引いたり、言外の意味を考えたりして、昔の人の気持ちを理解しようとする努力にこそ大きな意味があります。ストーリーを知りたいのであれば、ネットで検索すれば簡単に知ることができますが、それにどんな意味があるのかということです。

こうしたことは日本の匠の精神にも通底しています。作品を高値で売ることが目的ではなく、見えないところの細工にこだわったり、自分が納得いくまで作品に心と技を注ぎ込むことを最重視しているのです。こうした匠の精神こそが、日本の文化を支えてきたのです。

私は、グローバリゼーションや成果主義に偏重するあまり、そうした匠の精神が失われることがとても怖いと思っています。結果ではなく、ベストを尽くすことが心の安らぎに通じるという日本人の心の豊かさを、もっと世界の人に知らせるべきだと思います。

ブラウン　外国の人は、日本の匠の文化にとても感銘を受けます。自分を極めることに価値を見出す精神は、長い歴史の中で培われてきたものです。江戸時代の人々は生活の中に美や文化を取り入れ、生きること自体が美しいという美意識を持っていました。現代人はそうした感覚が貧弱になっているのは悲しいことです。

松山　お金を儲けるにはアイデアとやる気が必要ですが、お金を使うとなると文化に対する関心や素養が必要です。

とりわけ若くしてビジネスで成功を収めた方の中には、羽振りのいい暮らしをしていても、文化に対して関心が薄かったり、刹那的で品や徳に欠ける人がいて残念に思います。ビジネスリーダーたる人は、そういう面にも手間と時間をかけて磨いてもらいたいですね。

ブラウン　どうすれば徳を磨くことができるでしょうか。

松山　例えば、老舗企業に学ぶことが大事だと思います。350年にわたって事業を続けておられる月桂冠の大倉治彦社長は、銀行勤めを経て家業の酒造りを継ぐまで、父親から

酒造りについて教わったことは一度もなかったそうです。その代わり、「嘘をつくな、贅沢をするな」といった生き方については、耳にタコができるくらい聞かされてきたそうです。そういう価値観や人間の徳といったものを、若い経営者の方に学んでほしいですね。

日本人が海外でできること

堀井　日本人が海外に出て文化的に貢献できることはありますか。

近藤　あります。例えば私は今、かつてフランスにあったアルザス成城学園という私立大学の寄宿舎の建物と庭を買い取って改修して、欧州にある日本の伝統工芸品を鑑定・修復する工房をつくり、また日本庭園や能舞台、茶室などを建てるプロジェクトを立ち上げつつあります。ヨーロッパには日本刀や甲冑、茶碗、漆器など、ものすごい数の日本の伝統工芸品があるのですが、現地の人はそれをどう扱っていいか分からず、修復もせずにどんどん価値が下がっています。そこで日本の伝統工芸の職人さんがアルザス成城学園の跡地に工房を持ち、そうした美術工芸品の鑑定や修理を行うとともに、修復する職人の育成にも携わっています。

ここで大事なのは、日本の匠職人がヨーロッパに行って現地の職人や学芸員と触れ合うことで、ヨーロッパ人が日本人の匠の技と心を直に見て感じ、学ぶことです。あるいは能を観たり、お茶を楽しむ。本来なら日本に来てもらうのが一番いいのですが、同じようなものをヨーロッパに作り、そこを拠点として、現地の人に日本の伝統文化の粋に触れてもらいたいと思っています。そこで日本人と交流することで、気に入ったら日本に来てもらってもいいし、日本に来なくてもヨーロッパで手軽に日本人の感性に触れることができます。私はそういう場所を作りたいと思って活動しています。ジャパンハウスを作ってアニメを宣伝するのもいいですが、松山さんがおっしゃった日本文化を「doing」、「being」できる場をヨーロッパに作れば、かなりの成果があがると思っています。

松山　海外在住の日本人は、日本文化のアンバサダー（大使）だと思います。そういう方々のネットワークを広げていけば、日本文化の良さをより多くの外国人に知ってもらえるでしょうし、日本観光を促進する一つの道筋にもなるでしょう。

ブラウン　私は今、「会所プロジェクト」というのを進めています。「会所」とは、平安時代の終わり頃に存在した文化サロンです。貴族や武家、町人らが身分を明かさずに集う連歌会が原型といわれ、室町時代には茶道や香道など芸道の発祥を支えました。こうした会所文化を現代に合わせた形で作ってはどうかと考え、近衛忠大さん（クリエイティブ・ディレクター）を理事長として平成の会所を作ろうとしています。そして今、ニューヨークやドバイ、台北など、世界的なネットワークもできつつあります。

松山　外国での日本食や禅などは、その本質が間違って伝わっている場合が多々見受けられます。例えば、禅の目的は自分自身を見つめ明らかにすることですが、欧米における「ZEN」は、会社の業績を上げるとか、人間関係を良くするといった非常に功利的な手段にされています。海外に出ていくかぎりは、そうした本来の意味を知らしめることも私たちの役目の一つだと思います。

近藤　ブラウンさんがおっしゃった「会所」のように、短期的に何かを成し遂げるためではなく、何となく問題意識のある人が集まっていろんな意見交換をする場は必要ですね。そこに日本文化を知っている人がいて、その人を中心にしてネットワークの輪が広がっていくやり方を奨励すればいいでしょう。そしてうまくいったオーガナイザーを表彰してもいいですね。

堀井　とても有意義なお話を伺い、目が開けるような思いです。皆さんのご意見を参考に、当協会も万博記念基金事業を通じて、日本の良さを発信するプロジェクトをどんどん支援していきたいと思います。ありがとうございました。

（2017年2月10日／大阪天満宮にて）

エバレット・ブラウン氏
1959年、ワシントン生まれ。1988年から日本定住。epa通信社日本支局長を経て、ブラウンズフィールド代表、「Kyoto Journal」寄稿編集者。

近藤誠一氏
1972年外務省入省。ユネスコ日本政府代表部特命全権大使（06年）等を経て、2010年に文化庁長官に就任。13年同長官を退任後、現職。

松山大耕氏
1978年京都市生まれ。東京大学大学院農学生命科学研究科修了後、平林寺（埼玉県）で修行。06年より現職。観光庁ビジットジャパン大使。

（50音順）

水都を寿ぐ【交響楽 能】

2020 文化プログラムを目指して

出演者に伺う

佐々木洋三
関西・大阪21世紀協会
専務理事
（総合プロデューサー）

ギオルギ
バブアゼさん
関西フィルハーモニー
管弦楽団 指揮者

朝倉祥子さん
関西フィルハーモニー
管弦楽団 顧問

山本章弘さん
観世流能楽師シテ方

村上麻理絵さん
ダンサー、振付家

山口由里子さん
声優、女優

大西 毅さん
演出家

関西・大阪21世紀協会は、大阪城や周辺のホール、八軒家浜や道頓堀などを活用し、国内外のさまざまなアーティストに発表の場を提供する「大阪城フェスティバル構想」実現に向けて社会実験を続けてきた。

昨年11月21日には、大阪城を間近に望むNHK大阪ホールで、「水都を寿ぐ【交響楽 能】East meets West」を上演。世界トップレベルのヴァイオリニスト・オーギュスタン・デュメイさんによる演奏、アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」などで有名な声優・山口由里子さんが語り部となり関西フィルハーモニー管弦楽団（指揮：ギオルギ・バブアゼさん）と能楽師・山本章弘さんのコラボによる新作能「水の輪」、さらにコンテンポラリーダンスの村上麻理絵さんと豪華出演陣を迎え、東西文化のコラボを実現。会場を埋める約1000人の来場者は感動の渦に包まれた。

今回、2020年東京オリンピック・パラリンピックの「大阪版文化プログラム」を目指し、本公演について感じたことやアイデアを出演者の皆さまに伺った。

水都を寿ぐ【交響楽 能】East meets West

企画・制作・主催：関西・大阪21世紀協会
協力：NHK大阪放送局
後援：関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会、大阪観光局

能とクラシックの両方の良さを知ってもらえるよう選曲しました。
— 朝倉祥子さん

佐々木　交響楽と能のコラボレーションを上演するに際し、どのようなことを意識されましたか。

バブアゼ　能と共演するにあたって、私たちは能についてちゃんと理解し、オープニングからエンディングまで、しっかりと丁寧に準備してまとめ上げるよう意識しました。そうすることでコラボレーションとして上質な作品に仕上がり、お客様に西洋と和の文化の良さがしっかり伝わったと思います。私も日本独自の文化を間近で感じ、とても楽しかったです。「水の輪」というストーリーも分かりやすかったですね。

佐々木　能に合わせる楽曲をどのように選ばれたのですか？

朝倉　選曲にあたっては、お客様がクラシックを聴き慣れた方ばかりではないと考え、できるだけ分かりやすいものを意識しました。能のスタイルに合わせて、音楽も派手になりすぎない弦楽器の音が合うと思い、グリーグのホルベルク組曲がぱっと脳裏に浮かびました。もちろんオーケストラの良さも知っていただきたいですから、今回のテーマである「水都」に合わせて、モルダウ（スメタナ『我が祖国』より）も聴いてもらいたいと思いました。清々しい川の流れをイメージさせるもので、広く知られる名曲です。クラシックにも能にも縁遠い人でも、今回のコラボレーションで両方の良さに出会っていただけたのではないでしょうか。

村上　私も「水都大阪」の水辺の情景を思い浮かべながら踊りました。ヨーロッパにも水の都と呼ばれるところがたくさんありますから、東と西の文化を「水」という共通のキーワードでつなぐことができればいいなと。また、「祈り」ということも意識しました。「祈り」には、自分の気持ちや周囲の空気を鎮め、新たな世界に向かう思いが込められています。私の出番は交響楽が終わって能がはじまる前でしたので、祈りによって場の空気を変え、新たな世界のはじまりを告げる役割だと考えたのです。

佐々木　本公演で山口さんは「東西文化の接着剤の役割」を語り部として果たされたわけですが、とくにどのようなことを意識されましたか。

山口　能で表現されている物語を敢えて言葉で説明するという、とても重要な役どころを担当させていただきました。緊張しつつも平静を保ち、ゆっくりと、お客様の心に情景だけが浸透していくように、と心がけながら読ませていただきました。

ヴァイオリンの音に合わせて登場する演者の神妙な顔を見て、思わず笑いそうになった。
— 山本章弘さん

山本　能は西洋音楽と違って、全員で音程を合わせるという概念がありません。楽器にしても調律という概念はなく、フルートと違って、能管（笛）は2つとして同じ音程のものは存在しません。能のお囃子が、譜面通りにキーを合わせて演奏するクラシックと合奏することは、もともと不可能なんですね。

大西　だから今回は合奏ではなく、ダンスや語りを交えて交互に上演する構成にしました。むしろ、能と交響楽の素晴らしさをそのままお伝えするには、その方が効果的です。とはいえ一緒に絡むシーンもご覧いただきたかったので、山本さんにお願いして水鳥の登場シーンで実現していただきました。

佐々木　コンサートマスターの独奏だけで能楽師が入場するシーンがありましたが、リハーサルの時に、お囃子方が肩を震わせて笑っていましたね。

大西　本来は能の笛の音で水鳥の精が登場するのですが、まさかのヴァイオリンだったのです。山本さんに快くお引き受けいただきました。

山本　じつはそれが難しかったのです。普段は笛の音を合図に動くところを、ヴァイオリンにするとタイミングが分からなくなるのです。私は、演者が神妙な顔つきでヴァイオリンの音に注意を集中している姿を端で見て、思わず吹き出しそうになりました。能楽はもともと武家のたしなみでもありましたから、力士が土俵で粛々としているのと同じで、舞台上で笑顔を見せたり、お客様の拍手や声援に応えてはいけません。だから一生懸命に笑いをこらえていました。

　囃子方は、真後ろから響くオーケストラと交互に演奏し「サラウンドで最高だった」と喜んでいましたよ。

佐々木　能は、昔の言葉遣いで動きも少ないですから、見ていてもストーリーは分かりにくい。スクリーンで字幕を流すと舞台の演技に集中できません。そこで山口由里子さんに語り部になっていただきました。そうして観客にストーリーをご理解いただくことと併せ、和と洋の音と所作をじっくりご覧いただき、感じていただこうと思いました。

和英併記のプログラム

新作能「水の輪」あらすじ

　昔、京都からなにわに向かう旅人が、山崎あたりで女性が漕ぐ川舟に乗せてもらう。女性は昔の淀川の美しいようすを語るが、なにわが近づくと「今は水が汚れて入ることはできない」と嘆き姿を消す。旅人が呆然としていると、一羽の水鳥が「それは淀川に住んでいた水神様だ」と告げ、外国からの渡り鳥たちと一緒に川を掃除しはじめる。そうして川は再び美しさを取り戻す。

オーギュスタン・デュメイさんと
関西フィルハーモニー管弦楽団

それぞれが見事に表現されていて、あまりの美しさにドキドキしていました。
― 山口由里子さん

山口　客席から観られなかったのが残念でなりませんが、能では美しく色鮮やかな水鳥たちの世界を、音楽では静かにまたはダイナミックに水の流れや水音を、ダンスでは繊細な水の清らかさを、それぞれが見事に表現されていて、そのあまりの美しさにドキドキしながら舞台袖で拝見しておりました。あの時の感動は今でも忘れられません。

山本　山口さんならではの情感豊かなナレーションのおかげで、お客様のストーリーに対するイメージが膨らみ、能の演技に引き込む助けとなりました。私は今回、アニメファンの方にはアニメを観る感覚で能を観てもらってもいいし、声優さんの声と能の謡を聴き較べてもらうのもいいと思いました。

大西　山口さんに語り部をお願いしたのは、世界発信を考えてのことです。山口さんは、有名なアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」や「ワンピース」などで、その声は世界的に知られています。アニメファンにとっては、赤木リツコ（新世紀エヴァンゲリオンの登場人物）が能の語りをしているのを聞いて、とても興味深く、新鮮な印象を持たれたことでしょう。

佐々木　今回のイベントは、上方文化を世界へ発信しようとインターナショナルスクールの子どもたちや留学生にも協力してもらいました。

バブアゼ　水鳥に扮した子どもたちが登場するシーンでは、会場がほほえましいムードに一変しましたね。バッハの音楽には水鳥とか、かわいいというイメージはないのですが、世界の子どもたちとの共演で日本の文化や精神も違和感なく伝わったと感じました。

山本　とはいえ、子どもたちにすり足で動く意味や行儀よく整列することなど、日本の伝統文化や習慣を理解してもらうのにはとても苦労しました。

アイデンティティがしっかりしていれば、異なる文化にも合わせられるのです。
― ギオルギ・バブアゼさん

佐々木　アニメは国内外を問わず若者に大人気ですが、日本の伝統芸能の魅力を世界の若者に伝えるには、どんなことが必要だと思われますか。

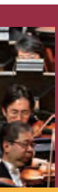
山口　歌舞伎や狂言、バレエなどは若いスターが生まれ、幅広い年齢層の女性ファンの方々が増え、そこから若い方々にも広まったように思います。私の同世代の友人もよく歌舞伎やバレエを観に出かけております（笑）。また、バレエは最近、舞台公演を映像化し映画館で観られるようになりました。映画館で予告編を観てバレエを舞台で観てみようと思う方もいらっしゃるようです。伝統芸能が身近に感じられるようになると、若い方々にも興味を持っていただけるのではないかと思います。

バブアゼ　日本の若者は伝統芸能やクラシックのことをあまり知りません。学校や家庭で教えないからでしょう。古典芸能は予備知識なしに理解することは難しいですから、子どもには小さいときから教えることが大事ですね。とはいえ近頃は家族がそれぞれに忙しく、一緒に文化に親しむ機会が少なくなっています。だから自分の国の歴史と伝統文化の結びつきが分からないまま成長し、自国の文化について語ったり、文化は心を豊かにできるものであることが分からなくなっている。これは日本に限ったことではありません。クラシックでは、音楽の歴史について勉強せずに、単に楽器の弾き方やテクニックを学ぶだけでは、豊かで深い表現はできません。自分たちの国の歴史や文化を知ることも大事です。

佐々木　自国のアイデンティティ、自分の立つ座標軸を持つことが大切なのですね。

バブアゼ　その通りです。そういう文化的なアイデンティティをしっかり持っていれば、異なる文化に対しても敬意や理解しようという思いが生まれ、コラボレーションもうまくいきます。芸術の目的は、それを楽しむことで喜びを感じ、人の心を豊かにすることです。能とクラシックでは表現の方法は異なりますが、目的は同じなのです。

朝倉　今回のコラボでは、日本に長く住んでおられ、日本文化にも理解が深いバブアゼさんに指揮をしていただき本当に良かったと思います。人は文化でしかひとつになれません。その文化を育み、発信する取り組みを、民間の方々で組織された関西・大阪21世紀協会が推進されているのは、素晴らしいことだと思います。



「ラデツキー行進曲」で、水鳥の帽子をかぶって観客に手拍子を促すギオルギ・バブアゼさん

村上麻理絵さん

シテ・山本章弘さん（右）と大鼓・山本哲也さん（下左）、小鼓・成田達志さん（下右）

コンテンポラリーダンスと能は共通点が多く、踊っていて、とてもしっくりきました。
— 村上麻理絵さん

村上　私はこれまで、「山姥」や「紅葉狩」などの能の作品をダンスで表現する機会が何度かありました。能は最小限の動きによって観る人に想像してもらう芸能ですので、観客も受け身ではいられません。コンテンポラリーダンスも同じで、あえて喜怒哀楽がストレートに分かるような表現をしません。例えば「祈り」を伝えるために、お祈りの仕草をしないのです。だから分かりにくい部分もあるし、観客の想像力に訴えるところが多くなります。その点は能と共通していますね。

山本　能は、始まりと終わりのタイミングがあいまいです。とくにエンディングは音や残像の余韻を感じてもらうため、お客様も拍手するタイミングが分かりにくい。それは、能が演者とお客様で「間（ま）」を共有する芸能だからです。今回のアンコールは「ラデツキー行進曲」で、しかもお客様の手拍子で最後は舞台と客席が渾然一体となりました。お客様と間を共有するという意味では能に通じるものがあり、とても楽しく演じることができました。

大西　演出にあたっては、山本能楽堂さんや関西フィルさん、村上麻理絵さん、山口由里子さんたちの一流の演技をそのまま伝え、味わってほしいと思いましたから、それを邪魔しないようできるだけ舞台装置をシンプルにしました。音響や照明などのスタッフも経験豊富な一流のアーティストたちですから、私の意図を汲んで、それ以上の素晴らしい仕事をしてくれました。

日本の一流アーティストを世界に発信する仕事だと考えて臨みました。
— 大西　毅さん

佐々木　関西・大阪21世紀協会は、大阪城や周辺施設に世界各国からアーティストやパフォーマーを呼び寄せ、世界に向けた文化発信拠点にする「大阪城フェスティバル構想」を提唱しています。今回の「交響楽 能」をNHKホールで開催したのも、そうした意図からです。

大西　これまでにない新しいコラボレーション公演にお客様の反響も上々で、「また観たい」という声を多くいただきました。その言葉の通り、全国各地で集客できる上質な作品に仕上がったと思います。佐々木さんがおっしゃる通り、私は今回のイベントを、日本の一流アーティストを世界に発信する仕事だと考えて臨みました。

村上　私は2012年に協会主催で行われた「大阪城サマーフェスティバル」の「オープニング・ガラ」にも出演させていただきました。荘厳な大阪城をバックに大手門前広場で踊る貴重な経験でした。大阪は東京に比べてコンテンポラリーダンスの公演数がとても少なく感じます。だから「大阪城フェスティバル」のように、ここを核として大阪がさまざまな文化の発信拠点になれば素敵だなと思います。大阪人のパワーも大きいですからね。

山口　文化とは国や人の心を豊かにするものだと思いますが、少し前から日本の文化が衰退しているように感じておりました。「大阪城フェスティバル構想」をこの公演で初めて知りましたが、生まれ育った大阪が世界に向けて日本の文化を伝えようとしている、それによって日本を代表する国際都市になろうとしていることをとても嬉しく誇りに思います。「水の輪」に参加させていただき、心より感謝いたします。

朝倉　今回は子どもたちや留学生も一緒に出演するというので、2020年の東京オリンピックに向けた期待感や若い躍動感などが伝わる曲「ホルベルク組曲　前奏曲」（グリーグ）をコンサートのオープニングに選びました。エンディングの『美しく青きドナウ（ヨハン・シュトラウスⅡ世）』も水に関連していますが、オーストリアでは第2の国歌と言われる名曲で、戦争で打ちひしがれたウィーンの人々を勇気づけるために書かれたものです。文化で平和な世界を作るんだというメッセージが込められており、私は、世界に向けて日本の文化を発信するという今回の企画や、文化で社会を活性化させる関西・大阪21世紀協会の取り組みにとてもマッチすると感じました。

佐々木　かつて大阪城の西の丸庭園にステージを製作し、関西フィルハーモニーの首席指揮者、藤岡幸夫さんに指揮をして頂きました。藤岡さんは「世界各地でタクトを振ってきたが、ライトアップで輝く大阪城をバックにしたこんなに素晴らしいステージは世界にもない。どうして大阪はこれを活用しないのか？」と演奏後にお話しされていました。大阪城には多くの観光客が集まります。こうした歴史文化のレガシーである大阪城を舞台に各国アーティストが集う舞台芸術のフェスティバルが開催できたらと思っています。どうもありがとうございました。

山本能楽堂による「水の輪」
スクリーンの映像は旅人が舟に乗った淀川上流（山崎）の風景

留学生たちの協力で世界へ発信

公演にあたり、大阪市の『平成28年度外国人留学生との連携拡大及び起業支援事業』（事業受託：（株）ナジック・アイ・サポート）が実施する交流プログラム*を通じ、留学生ボランティアにも準備段階から公演当日まで協力いただき、国際相互理解を深めるとともに、日本の伝統芸能である能を世界に発信した。また、協会は当イベントをSNSで情報発信した学生の入場料を無料にし、大阪の文化力を広く内外へアピールした。

今回、イベントに参加した留学生に率直な印象を語ってもらった。

＊交流プログラム…留学生が、大阪の公的機関または地域団体などと協働・連携して行うボランティア活動。将来の日本での就職などに活かせる経験や知識を得てもらうことが期待されている。

「交響楽 能」に参加して

王 慧（Wang Hui）さん

中国遼寧省出身
大阪大学外国語学部（日本語専攻）

日本の伝統芸能である「能」と交響楽が一緒に観られると聞いて興味を持ち、参加しました。能は大学の見学旅行で一度観たことがありました。今回、演出の大西さんから「出演してみてはどうですか」と誘われ、こんな機会は滅多にないと思い、水鳥役で出演させてもらいました。インターナショナルスクールの子どもたちと一緒に出演するのは楽しかったし、何より能楽師の演技を目の前で観られたのはとても貴重な経験になりました。能を観て、演じて、日本の伝統文化の重みを感じましたし、それを一生懸命受け継ごうとしている日本の人たちにも感心しました。現在、大学で学ぶかたわら、薬局で通訳のアルバイトをしています。日本のことをもっと知り、将来は日本で就職したいと思っています。

孫 剣峰（Sun Jianfeng）さん

中国山東省出身
立命館大学理工学部（電気電子工学専攻）

日本で何かボランティア活動をしたいと思っていたところ、大学の案内で交響楽能の募集を知りました。能は観たことがありませんでしたが、面白そうだったので参加することにしました。それをツイッターで発信したところ、日本人の友人から「私ですら観たことがないのに、しかも出演するなんてすごい！」と返事がありました。日本の若者は、チケットを買って能を観に行く人はあまりいないんですね。その友人は今回の舞台を観に来てくれて、舞台の上の私をすぐに見つけてくれました。参加してとても楽しく、能管の音色が感情を表現しているのを間近で聴いていて、素晴らしいと思いました。私は日本の先進技術を学んで、将来はそれを活かす仕事に就きたいと思っています。

趙 文琳（Zhao Wenlin）さん

中国山東省出身
立命館大学大学院（経営学専攻）

日本の伝統文化に興味はありましたが、能は観たことがありませんでした。だから大学から案内を受けたとき、これは面白そうだと思って参加しました。山本能楽堂で実際に能を観させてもらい、舞台にも上げていただく体験ができて良かったです。開演当日はチケットの受付業務を担当しました。今回の公演についてLINEで発信していましたので、たくさんの留学生の友人が観に来てくれました。日本の若者と同じように、中国の若者も伝統芸能である「京劇」はテレビでは観て知っていても、実際に劇場に行って観る人はあまりいません。観劇料も結構高いんです。また、能には昔の中国起源の話もあることに驚きました。

関西・大阪21世紀協会からの感謝状を受けた留学生の皆さん。左から孫さん、王さん、趙さん。

世界各国からやって来た水鳥たちが川をきれいにする（インターナショナルスクールの子どもたちが出演）

インターナショナルスクールの子どもたちと一緒に出演した孫剣峰さん（右端）

王慧さん（中央）

平成29(2017)年度
日本万国博覧会記念基金事業

国内外57事業に総額9200万円の助成を決定

万博記念基金では、平成29年度の助成事業として、合計57件、総額9200万円の決定をしました。

募集にあたっては、国際相互理解促進活動および文化的活動を対象に、「国際文化交流」、「日本の伝統文化」および熊本地震被災地で開催される事業を重点テーマとして公募したところ、国内外から212事業の申請がありました(下表参照)。

これらの申請事業は、外部委員からなる万博記念基金事業審査会(審査委員長:鷲田清一・京都市立芸術大学学長)での審査を経て、助成事業一覧(p 12)のとおり決定しました。

■事業名:**モスタルの子供たち×ガンバ大阪ジュニア国際交流活動**
■事業者:**特定非営利活動法人　Little Bridge**
■実施地:大阪府　■実施期間:平成29年7月または8月の1週間
■交付決定金額:180万円

事業概要 元サッカー日本代表主将の宮本恒靖さんが立ち上げた「マリモストプロジェクト」の一環となる事業で、かつてボスニア・ヘルツェゴビナで民族紛争の地となったモスタル市の子どもたちを日本に招きます。ガンバ大阪とサッカーの交流試合や日本の子どもたちとの交流を通じて、日本の伝統文化や精神性に触れてもらうことで、他者への理解ひいては民族融和のきっかけを提供することを目的として実施します。

©Little Bridge Japan(2点とも)

■事業名:**第3回歳松会コンサート　～心に響く鼓の世界～**
■事業者:**一般社団法人 邦楽囃子研究所歳松会**
■実施地:東京都 日本橋公会堂　■実施期間:平成29年10月20日
■交付決定金額:110万円

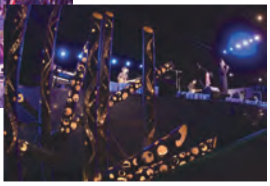
事業概要 邦楽囃子音楽は、古くは能楽より歌舞伎音楽に取り入れられた小鼓・大鼓・太鼓・笛などの日本の伝統管打楽器群です。現在は歌舞伎・日本舞踊・三味線・文楽・箏曲・尺八・琵琶・現代邦楽・洋楽などのあらゆる音楽と共に演奏し、伝統音楽にとってなくてはならない重要な古典音楽となっています。この邦楽囃子音楽の伝統の継承・発展・普及を目的として企画された演奏会を開催します。

「第2回歳松会コンサート 邦楽はやし in Asia」より、長唄『石橋』

「第1回歳松会コンサート 邦楽はやしの世界へ」より、水墨画入り『かぐや姫』
撮影:熊谷 正(2点とも)

■事業名:**今こそ音楽のチカラ　熊本城アカリトライブ2017**
■事業者:**今こそ音楽のチカラ実行委員会**
■実施地:熊本県 熊本城 二の丸広場　■実施期間:平成29年8月のうち1日
■交付決定金額:300万円

事業概要 本事業は、平成28年4月に発生した熊本地震で被災された方々を対象にした入場無料のライブイベントです。復興へ向けて前を向くためのメッセージを届けるチカラのあるアーティストたちに発信してもらい、音楽を通じて心が沈みがちな被災地の方々を元気づけ、勇気づけることを目的に開催します。



■事業名:**オークリッジ国際友好の鐘　平和の鐘楼の建設**
■事業者:**アメリカ合衆国テネシー州オークリッジ市**
■実施地:オークリッジ AKビッセル・パーク ■実施期間:平成29年4月1日～平成30年3月31日
■交付決定金額:595万円

事業概要 広島に投下された原子爆弾の成分となったウラン235の生産工場のあったオークリッジ市に、1996年に日本との平和と友好の記念碑として設置されたオークリッジ国際友好の鐘は、平和のメッセージを伝えることを目的としたものです。現在の鐘楼の梁が経年劣化のため撤去されており、鐘を撞くことができないため、日本との国際友好の鐘に新たな鐘楼を建設します。

イメージパース　©Ziad Elias Demian, AIA−APA

(単位:件, 万円)

申請・採択状況(前年度比較)		申請				採択			
		平成29年度		平成28年度		平成29年度		平成28年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
国際相互理解促進活動	国際文化交流、国際親善に寄与する活動	83	25,575	104	31,234	16	3,950	25	5,040
	学術、教育、社会福祉、医療および保健衛生に関する国際的な活動	47	10,886	56	16,267	15	1,630	15	2,540
	自然の保護その他人間環境の保全に関する国際的な活動	5	1,754	9	3,261	2	390	1	100
文化的活動	日本の伝統文化の伝承および振興活動	34	6,200	20	3,834	13	1,580	10	1,090
	芸術および地域文化に関する活動	43	8,129	27	5,079	11	1,650	11	1,230
合計		212	52,544	216	59,675	57	9,200	62	10,000

平成29年度　日本万国博覧会記念基金助成事業一覧　（※印は本年度の重点テーマ）

※国際文化交流、国際親善に寄与する活動

事業者名	事　業　名	助成金額（万円）
特定非営利活動法人Little Bridge	モスタルの子供たち×ガンバ大阪ジュニア　国際交流活動	180
認定特定非営利活動法人ミュージック・シェアリング	ICEP（インターナショナル・コミュニティー・エンゲージメント・プログラム）2017	300
日本・アイルランド外交関係樹立60周年記念事業 茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会	日本・アイルランド外交関係樹立60周年記念事業 茂山千五郎家狂言アイルランド公演実行委員会 アイルランドと日本の邂逅～W.B.イェイツ、ラフカディオ・ハーンと狂言	240
モザンビークのいのちをつなぐ会	第２回　アフリカ・マコンデ族の音楽と文化交流ツアー	200
アース・セレブレーション実行委員会	国際文化交流フェスティバル「アース・セレブレーション」30周年記念事業	300
一般社団法人エーシーオー沖縄	アジアTYA（児童青少年演劇）ネットワークミーティング	170
一般社団法人一糸座	日・チェコ国際共同公演「ゴーレム」	300
Shindofuji Ireland（アイルランド）	Silent Film Live Show（無声映画ライブショー）	25
一般財団法人日本京劇振興協会	こどもによる日中伝統芸能交流公演（仮）	300
東北と世界を結ぶ祭博実行委員会	東北と世界を結ぶ祭博2017 TSUNAMI芸術祭	250
東京藝術大学シルクロード特別企画展 実行委員会	東京藝術大学シルクロード特別企画展	250
一般社団法人ミュージック・マスターズ・コース・ジャパン	ミュージック・マスターズ・コース・ジャパン　ヨコハマ２０１７	250
公益財団法人神戸市民文化振興財団	第9回神戸国際フルートコンクール	250
土佐和紙国際化実行委員会	第10回高知国際版画トリエンナーレ展	140
トラモア開発トラスト（アイルランド）	日本の庭	200
テネシー州オークリッジ市（アメリカ）	オークリッジ国際友好の鐘　平和の鐘楼の建設	595

学術、教育、社会福祉、医療および保健衛生に関する国際的な活動

事業者名	事　業　名	助成金額（万円）
公益社団法人日本地震学会	国際測地学協会及び国際地震学・地球内部物理学協会合同学術総会	300
第14回ミュオンスピン回転・緩和・共鳴（μSR）国際会議組織委員会	第14回ミュオンスピン回転・緩和・共鳴（μSR）国際会議	230
EMECR2017組織委員会	1st International Conference on Energy and Material Efficiency and CO2 Reduction in the Steel Industry	110
第26回アジア-太平洋雑草科学会議組織委員会	第26回アジア-太平洋雑草科学会議	40
大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館	国際シンポジウム「在外日本資料研究の現在　―19世紀に形成されたコレクションを中心に」（仮題）	70
一般社団法人 アール・アンド・アールコミュニティー	第17回 レスキューロボットコンテスト	70
日蘭学生会議	第8回日蘭学生会議	110
特定非営利活動法人パンゲア	「ICT×アート」協働制作を通して学ぶ児童のための多文化共生サマースクール	140
The 7th East Asian Group of Rheumatology	第7回 日中韓リウマチ合同会議	90
トリニティ・カレッジ・ダブリン（アイルランド）	「世界的視野から見た日本学：友情を築く術」と題したアイルランドのトリニティ・カレッジ・ダブリンと日本の大阪大学による国際的な日本研究シンポジウム2017	60
模擬国連会議全米大会 日本代表団派遣事業運営局	2018年模擬国連会議全米大会第35代日本代表団派遣事業	70
International Development Field Camp for Myanmar and Japan Youth Leaders	International Development Field Camp for Myanmar and Japan Youth Leaders 2018	120
NPO法人AfriMedico	タンザニアにおける置き薬事業モデルの立ち上げと医療環境改善への取組み	70
公立メリカルヴィア高校（フィンランド）	メリカルヴィア高校・佐野高校国際交流事業	70
一般社団法人日本学生会議所関西支部	UNISC関西主催 国際学生会議「経済発展と国際開発　～アジアの相互協力の構築を目指して～」	80

自然の保護その他人間環境の保全に関する国際的な活動

事業者名	事　業　名	助成金額（万円）
ISPTS2017実行委員会	残留性有害物質に関する国際会議 2017	300
公立大学法人大阪市立大学	国際学術シンポジウム「人と植物の共生 ―都市の未来を考える―」	90

※日本の伝統文化の伝承および振興活動

事業者名	事　業　名	助成金額（万円）
一般社団法人邦楽囃子研究所歳松会	第3回歳松会コンサート　～心に響く鼓の世界～	110
さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座	『さっぽろ人形浄瑠璃』活性化プログラム事業	250
特定非営利活動法人和歌の浦万葉薪能の会	第19回　和歌の浦　万葉薪能	100
公益財団法人小田原文化財団	『杉本文楽　女殺油地獄』	100
神戸能楽の集い実行委員会	神戸能楽の集い	230
近松の里づくり事業推進会議	「たちまち近松まつり」20周年、「立待月観月の夕べ」15周年、「たちまち子ども文楽」設立5周年記念「文楽のまち立待」3Days	100
平和市民公園能楽堂共同事業体	こども能楽教室	100
大阪薪能委員会	第61回　大阪薪能	100
春江大好きプロジェクト	第7回子ども落語笑学校	50
大阪城本丸薪能実行委員会	大阪城本丸薪能2017	200
野崎参道商店街振興組合	野崎観音　さくら能	80
公益財団法人千葉県文化振興財団	千葉県こども歌舞伎アカデミー	100
能楽文化振興協会	『天満・天神』街遊び　伝統の美にふれる　～観て、聴いて、知って、楽しむ　能楽講座～	60

芸術および地域文化に関する活動

事業者名	事　業　名	助成金額（万円）
※今こそ音楽のチカラ実行委員会	今こそ音楽のチカラ　熊本城アカリトライブ2017	300
南風原町少年少女合唱団	伝えたい、繋げたい沖縄のわらべ歌・昔歌　～ワークショップからフォーラム＆コンサートまで～	100
相馬ながれやま踊りJuniorの会	相馬ながれやま踊りJuniorの会　関西公演事業	190
一般社団法人日本テレマン協会	中之島をウィーンに! 中之島発、大阪＝ウィーン交流コンサート	120
公益財団法人登米文化振興財団	劇団ドリーム☆キッズ　第15回ミュージカル公演	200
紀の国トレイナート実行委員会	紀の国トレイナート2017	200
特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ	U-35　35歳以下の若手建築家による建築の展覧会2017	60
丹波ささやま人形劇フェスタ実行委員会	丹波ささやま人形劇フェスタ	60
一般社団法人三好市観光協会	祖谷襖からくり公演（襖からくり公演・祖谷文化伝承祭り）	70
一般社団法人大阪コレギウム・ムジクム	大阪コレギウム・ムジクム第117回大阪定期公演　大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団〈現代（いま）の音楽～Music of Our Time～〉　シリーズvol.27	100
やなぎみわステージトレーラープロジェクト	やなぎみわステージトレーラープロジェクト「日輪の翼」	250

アーツサポート関西

平成29（2017）年度 総額750万円を17事業に助成決定

Arts Support Kansai

岩井コスモ証券様からの2,000万円の寄付により、新たに個人向けの助成も始動！

2014年4月に発足したアーツサポート関西（ASK）は、これまで9,000万円の寄付を集め関西で芸術・文化に取り組む約50の団体や個人に対し、約3,000万円の支援を実施してまいりました。とくに、今後の飛躍が期待される若い世代の活動を支援してきた点が大きな特徴で、支援先からは「先端的な舞台構成に挑戦できた」「野外公演の困難なロジスティックス（物流）が解決できた」「ベルギーでの個人レッスンが実現した」など、次世代を担う若い芸術家たちから感謝の声が多く寄せられています。

このたび決定した平成29（2017）年度の公募助成では、美術・デザイン、音楽、舞台芸術、伝統芸能の4分野において、17の個人・団体に対し総額750万円の助成が行われることになりました（p14の表参照）。

また今回の助成では、昨年、岩井コスモ証券株式会社創業100周年を記念して設置された2,000万円の「岩井コスモ証券ASK支援寄金」より、400万円が国際的な水準の活動を行う40歳以下の若い芸術家7名に対して交付されることになりました。関西から世界にむけて羽ばたく若い才能をASKは力強くサポートしていきます。

採択された事業（一例）

＊写真は各助成交付先より提供

音楽（個人）

事業者：**周防亮介**

活動概要：**ヴァイオリニスト 海外のマスタークラスやコンクールへの参加を予定**

助成額：60万円

1995年京都府生まれ。12歳で京都市交響楽団と共演を果たすなど早くから才能を発揮。2010年ダヴィッド・オイストラフ国際ヴァイオリンコンクール最高位（モスクワ）、2014年出光音楽賞、2016年ヘンリク・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール（ポーランド）入賞および特別賞などを受賞。現在、東京音楽大学特別特待奨学生3年在学。今後、海外のマスタークラスおよびコンクールなどに参加を予定しているほか、出身地である関西での演奏会の開催を計画。

美術・デザイン（個人）

事業者：**野原万里絵**

活動概要：**他者の意思を介在させた共同作業によって絵画を制作**

助成額：60万円

1987年生まれ。大阪市在住。「絵を描く過程」に着目し、一定のルールの下で複数の他者が介在しながら大きな絵を描く取り組みを行います。他者とのコミュニケーションを通して作者の想像を超える表現が生まれ、絵画的な力強さを備えた作品は見る者を圧倒します。これまで「御堂筋定規」や「甲子園定規」など地域の特性を反映させたテンプレートを考案し、それを用いて他者との共同作業で作品を作ってきました。今後、伝統工芸や北欧の芸術への興味から、海外を含めたリサーチ活動も行っていきます。

伝統芸能（個人）

事業者：**楳茂都梅弥月**（うめもと うめみづき）

活動概要：**上方舞「楳茂都流」の継承・発展および譜本の研究**

助成額：70万円

1982年生まれ。大阪市在住。2歳より上方舞を習い、7歳からクラシックバレエを学ぶ。2015年楳茂都流師。2016年国立劇場50周年記念「伝統芸能の魅力」に出演。2009～2012年科学研究費補助金基盤研究「楳茂都陸平振付"春から秋へ"初演作品の研究」に参画。今年、「楳茂都流型付け研究会」を発足させ、大阪歴史博物館が所蔵する950点余りの譜本（型付け）を解読し、その一部を上演することを計画しています。またmidukiとしてダンスカンパニーに所属し、ダンサーとしても活動を行っています。

舞台芸術（団体）

事業者：**N2**

活動概要：**Tab.2 - 書き言葉と話し言葉の物性を表在化する試み『火入れの群』**

助成額：20万円

2015年に代表・杉本奈月を中心に発足した劇団。上演を重ねるごとに更新される『居座りのひ』は東京の演劇関係者に高く評価されたほか、大阪の公演はウィングカップ6最優秀賞を受賞。2016年から書き言葉と話し言葉の"物性"を表在化させる試み「Tab.」を始動。物理学、社会学等を援用するユニークなアプローチをとります。また演劇に関する情報共有・意見交換を行う月例会を主宰。演劇環境の向上やクリエイター創出にも取り組みます。

「Tab.1 水平と湾曲」撮影:松山隆行

平成29（2017）年度 アーツサポート関西 助成先

岩井コスモ証券ASK支援寄金助成（交付額順）：総額400万円

分野名	申請者名	活動名	交付額(万円)
伝統芸能	楳茂都梅弥月	上方舞「楳茂都流」の創流当時より受け継がれている譜本「型付け」の調査・研究など	70
音楽	松原智美	クラシックアコーディオンの演奏活動や普及活動、作曲家への新作の委嘱など	60
音楽	周防亮介	関西出身の若手ヴァイオリニストとして注目の存在。海外のマスタークラスやコンクールなどに参加予定	60
美術・デザイン	野原万里絵	「絵を描く過程」に着目し、他者の意志が混合する制作プロセスを考案。共同作業を通して巨大な絵画を制作	60
音楽	森口綾子	育児と演奏活動の両立を図る環境づくりの取り組み。0才から入場可能な本格的なクラシックコンサートを開催	50
美術・デザイン	湯川洋康	習慣・歴史・習俗など人間の営為やその痕跡と向き合い、多様な作品を制作。今年デンマークで展覧会を開催	50
美術・デザイン	前谷康太郎	デジタル技術に頼らず、イメージを抽象的な光の現象に還元する映像を手掛け、光の現象と映像の境界を探求	50

個別寄金「八千代電設工業伝統芸能支援寄金」助成

分野名	申請者名	活動名 ＜活動期間＞	交付額(万円)
伝統芸能	堺アートプロジェクト	「萩大名」狂言と現代喜劇 one story,two expression ～時を超えた狂言＜11/26＞	50

一般助成（交付額順）：総額300万円

分野名	申請者名	活動名 ＜活動期間＞	交付額(万円)
音楽	武生国際音楽祭推進会議	武生国際音楽祭2017＜9/10～17＞	80
美術・デザイン	新古宮展実行委員会	新古宮展＜4/1～16＞	50
舞台芸術	特定非営利活動法人　大阪現代舞台芸術協会	大阪現代舞台芸術協会プロデュース公演『大阪シアターフェスティバル』(仮)＜2/5～18＞	40
舞台芸術	大阪劇団協議会	大阪劇団協議会フェスティバル45周年記念合同公演「築地に響く銅鑼（仮）」＜2018/3/8～11＞	40
美術・デザイン	『アンキャッチャブル・ストーリー』展実行委員会	展覧会『アンキャッチャブル・ストーリー』＜6/3～7/9＞	20
音楽	ZEITPUNKT　OSAKA	コンサートシリーズZEITPUNKT　Vol.2「動く音　消えゆく音の展覧会」＜10/22＞	20
舞台芸術	N2	Tab.2-書き言葉と話し言葉の物性を表在化する試み『火入れの群』＜6/2～4＞	20
美術・デザイン	國府理「水中エンジン」再制作プロジェクト実行委員会	國府理「水中エンジン」再制作プロジェクト＜4/1～12/31＞	15
音楽	羽曳野少年少女合唱団	合唱練習＜4月～2018/3月＞	15

ヴァイオリニスト
小栗まち絵さんに最優秀賞を贈呈

小栗まち絵さん
(贈呈式にて)

大阪府内で開催された全公演の中から、とくに優れた成果をあげた人や団体を顕彰する大阪文化祭賞(主催：大阪府、大阪市、関西・大阪21世紀協会)。53回目を迎えた今年度は、「伝統芸能・邦舞・邦楽」「現代演劇・大衆芸能」「洋舞・洋楽」の各部門の中から、独創性に富み、企画・内容・技法が総合的に優れている65公演が最終審査され、最優秀賞ほか各賞が決定した。審査には、関西の著名な芸術家や文化人、ジャーナリストがあたった。

各分野を通じてもっとも優れた成果をあげた公演に贈られる最優秀賞は、相愛大学教授でヴァイオリニストの小栗まち絵さんに決定。昨年7月にいずみホール(大阪市中央区)で開催した「いずみシンフォニエッタ大阪・第37回定期演奏会」での演奏が、「豊穣な音色、歌心に満ちたフレージング。精神性や感情を音楽として伝える強烈な集中力で、時代を問わない音楽の普遍的な美しさと緊張感、親密性を会場に呼び覚まし、現代とルネサンス期をつなげて深い感動をもたらした」と高く評価され、相愛大学に30年以上勤め、大阪での音楽教育に長年尽くした功績も讃えられた。

今年2月21日の贈呈式(リーガロイヤルNCB：大阪市北区)で、新井純大阪府副知事から表彰を受けた小栗さんは、「私の独奏で日本初演をしたジャックボディー作曲の『ミケランジェロによる瞑想曲』は、私自身大変心を動かされた作品で、試行錯誤して演奏した結果が評価されて光栄に思う。音楽教育に務めてきたことも評価してくださり、とても嬉しい」と喜びを語った。

関西・大阪21世紀協会は、大阪文化祭賞を芸術・文化分野における人材の発掘や育成、交流事業の一環として重視し、受賞者の記念公演を主催するなどアピールに努めている。また、受賞者の一層の励みとなるよう、副賞賞金や記念盾も提供している。協会の堀井良殷理事長は贈呈式で、「昭和38(1963)年に創設された大阪文化祭賞は、半世紀以上にわたる歴史がある。優れた文化人、芸能人を輩出してきた大阪で、今日、皆さんによってその歴史に新たな1ページが加えられた。今後ますますのご活躍を祈念する」と、受賞者を讃えた。

受賞記念公演での小栗まち絵さん
大阪生まれ。1971年桐朋学園大学卒業。インディアナ大学アーティストディプロマ課程修了。1974～86年インターナショナル弦楽四重奏団のメンバーとして欧米を中心に活動。インディアナ大学助教授などを経て1986年帰国。2004年度エクソンモービル音楽賞、2009年度大阪市市民表彰(文化功労部門)など受賞多数。現在、いずみシンフォニエッタ大阪コンサート・ミストレス、相愛大学教授、東京音楽大学特任教授。

平成28(2016)年度各賞受賞者と受賞公演

■最優秀賞(副賞50万円)
- 小栗まち絵(ヴァイオリン)
  いずみシンフォニエッタ大阪 第37回定期演奏会における演奏

■優秀賞(副賞15万円)
- 「妹背山婦女庭訓(いもせやまおんなていきん)」出演者一同(人形浄瑠璃文楽座)
  四月文楽公演 通し狂言「妹背山婦女庭訓」の舞台成果
- MONO(劇団)
  「裸に勾玉(まがたま)」の舞台成果

■奨励賞(副賞5万円)
- 片岡松十郎・片岡千壽・片岡千次郎
  第二回あべの歌舞伎「晴(そら)の会」における片岡松十郎・片岡千壽・片岡千次郎の成果
- 大阪女優の会
  「あたしの話と、裸足のあたし」の舞台成果
- 地主薫バレエ団　奥村 唯
  「人魚姫」の演技
- 関西歌劇団
  関西歌劇団第98回定期公演「皇帝ティートの慈悲」の成果

(敬称略)

受賞者(前列)と主催者および各部門の審査委員長(後列)

中村壱太郎（かずたろう）（歌舞伎俳優）・佐々木美智子バレエ団

West meets East　愛の表現者たち

—— 2017年2月8日・クラブ関西 ——

佐々木美智子バレエ団

関西・大阪を拠点に活躍する優れたアーティストを紹介し、アーティスト支援の輪を広げることを目的に開催される「アート・アセンブリー（関西・大阪21世紀協会主催）」。第8回を迎えた今年は、平成27年度大阪文化祭賞優秀賞を受賞した佐々木美智子バレエ団と、同奨励賞を受賞した歌舞伎俳優の中村壱太郎さんを招き、日本と西洋の舞台芸術の粋が披露された。

中村壱太郎さんは中村鴈治郎さんの長男で、母は日本舞踊吾妻流宗家の吾妻徳穂さん。2014年には吾妻徳陽として七代目家元を襲名し、近年は映画での振付の創作やラジオのパーソナリティーなどでも活躍する歌舞伎界・日本舞踊界の若きリーダーとして注目されている。アート・アセンブリーでは、長唄舞踊「七福神」を披露し、80人を越える参加者を魅了した。

佐々木美智子バレエ団は、1979年に東大阪市でスタジオを開設し、98年にバレエ団を結成。以来、毎年公演を行い、2003年度文化庁芸術祭優秀賞をはじめ、国内外の数々のコンクールで入賞し、優れたダンサーを数多く輩出して国際的にも高く評価されている。今回は、「ドン・キホーテ」や「白鳥の湖」などのクラシックに加え、アニメ「アルプスの少女ハイジ」「ルパン三世」などで構成したプチ・ガラコンサートを披露。会場は華やかで愛らしい雰囲気に包まれ、参加者はダンサーの息づかいを間近で楽しんだ。

左から佐々木洋三、中村壱太郎さん、佐々木美智子さん

また、当協会専務理事の佐々木洋三の司会で、中村壱太郎さんと同バレエ団を主宰する佐々木美智子さんによる「West meets East 愛の表現者たち」と題するトークショーもあり、歌舞伎とバレエの愛情表現や、舞踊としての共通点や相違点、指導法などが紹介された。壱太郎さんは歌舞伎の愛情表現について「愛し合う男女が死んで一緒になることで幸せになる」と心中物について紹介すると、佐々木さんは「歌やセリフのないバレエでは、愛憎はマイム（所作）で表現する」と、身振り手振りを交えて解説。「日本舞踊は重心を下げてすり足で動き、バレエは重心を上げてつま先立ちで動くという大きな違いがあるが、体幹が揺るがないのはどちらも同じ。日舞は狭い空間で静かな動きで〈間〉の美しさを見せるが、バレエは舞台の端々まで使って大きく激しく動き回る（佐々木さん）」「日舞もバレエも、長い歴史のなかで培われ、先輩方が受け継いでこられた。その至芸の魅力を多くの方に楽しんでほしい（壱太郎さん）」と会話が弾み、参加者は普段直接聞く機会がない話に、興味深く聞き入った。終演後は交流会が開催され、参加者は出演者と直接ふれあい、さまざまな話題に花を咲かせ会話を楽しんだ。

中村壱太郎さん

出演者とともに

イベント報告

関西・大阪21世紀協会は、上方の文化芸能や伝統行事などの実行委員会に参画し、無形文化遺産の保護・育成に向けて活動しています。

200年の歴史をもつ賑やかな伝統行事

【今宮戎神社宝恵駕行列への助成・協力】

2017年1月10日／大阪ミナミ（道頓堀～今宮戎神社）
関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会

今宮戎神社十日戎の奉納行事として、元禄時代に花街の誘客や商売繁盛を祈願して始まった宝恵駕（ほえかご）行列。明治から昭和（戦前）にかけては、100挺もの駕が担がれ、盛大に賑わいました。現在は経済界や地元商店会などの協力により、大阪の新春を彩る伝統行事として受け継がれています。

今年は先頭に佳世子さんが芸妓を代表して駕に担がれ、歌舞伎俳優の中村鴈治郎さん、上方落語協会会長の桂文枝さん、日本舞踊山村流宗家の山村友五郎さん、OSK日本歌劇団トップスターの高世麻央さんらが続き、道頓堀から今宮戎神社までの道のりを約2時間かけて練り歩きました。

200年以上も続くこの行事は、無形民俗文化財に指定されています。関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会は、宝恵駕振興会実行委員会の実施運営に携わっています。

宝恵駕に担がれる芸妓・佳世子さん（今宮戎神社にて）

中村鴈治郎さん（道頓堀商店街にて）

北新地に福を呼び込む早春行事

【堂島薬師堂節分お水汲み祭り】

2017年2月3日／堂島薬師堂・曽根崎新地一帯
主催：堂島薬師堂節分お水汲み祭り実行委員会

大阪・キタの賑わいづくりと水都大阪の再生をめざし、2004年にはじまり今年で14回目。午後3時から堂島薬師堂（大阪市北区）で奈良薬師寺の村上太胤管主らによる節分法要が行われ、薬師寺で祈祷された「お香水（こうずい）」を参拝者の竹筒護符に汲み分ける「お水汲み」が行われました。夕刻からは隣接する堂島アバンザの特設舞台で、薬師寺僧侶たちによる日本の歌謡の原点といわれる「声明（しょうみょう）」が行われ、招福、無病息災、商売繁盛が祈願されました。その後、北新地芸妓衆による舞の奉納や北新地ホステスたちによる「お化け（仮装）」が行われ、堂島薬師堂の弁財天の化身といわれる「龍」とともに、総勢150名の大行列が北新地へと繰り出しました。協会の堀井良殷理事長は、この行事の共同実行委員長を務めています。

村上太胤管主（左）からお香水を受ける来賓の鈴木博之氏（関西経済同友会代表幹事）（堂島アバンザ特設舞台）

龍の巡行（北新地）

トピックス・ニュース

「真田丸」で九度山町を活性化 岡本 章氏（九度山町長）が特別賞を受賞 平成28年度 関西元気文化圏賞贈呈式

2017年1月23日／リーガロイヤルホテル大阪

岡本章氏（右）と桜花昇ぼるさん（合同祝賀会にて）

受賞者と主催者

文化・芸術・スポーツなどの分野で活躍し、関西から日本を元気に明るくした人や団体などへ、感謝と一層の活躍を期待して贈られる「関西元気文化圏賞（関西元気文化圏推進協議会・森詳介会長、関西・大阪21世紀協会も構成員の一員）。その贈呈式が文化庁芸術祭賞贈呈式と合同で行われ、和歌山県九度山町長の岡本章氏に特別賞が贈られました。

岡本氏は、人口4千人余の九度山町を活性化させるため、全国の関係者とNHKに対し大河ドラマ「真田丸」の誘致活動に取り組み、和歌山県や関西ゆかりの地の知名度向上に貢献しました。また、住民が主体となって多彩な活動を展開し、同町の真田ミュージアムの来館者は2016年11月に20万人を突破。その活動は、地域活性化のモデルケースとして注目されました。贈呈式には、ミュージカルで真田幸村役を数多く演じてきた元OSK日本歌劇団のトップスター桜花昇ぼるさんが幸村の舞台衣裳で駆けつけ、共に受賞を喜びました。平成28年度の各賞受賞者は次の通り。

大賞：京都鉄道博物館、特別賞：岡本章（和歌山県九度山町長）、ニューパワー賞：高橋礼華・松友美佐紀ペア（バドミントン選手）、リオ五輪400メートルリレー銀メダルチーム、びわ湖ホール四大テノール。（敬称略）

連載
関西釣り文化を探る（第3回）　佐々木 洋三

現代の鯛釣りの疑似餌
“鯛ラバ”

〝鯛ラバ釣り〟のルーツを求めて

真鯛が棲息する北限の津軽海峡から南限の屋久島まで、全国各地で人気沸騰の「鯛ラバ釣り」。釣り方は簡単で、餌をつけずに疑似餌を海底まで落としてただ巻き取るだけ、はじめて釣りをする女性や子どもでも手軽に百魚の王と崇められる真鯛を手にすることができるのが魅力です。この疑似餌、ブラックバス釣りのルアー「ラバージグ」に似ていることから、真鯛のラバージグを略して「鯛ラバ」と呼ばれるようになりました。

私がはじめてこの鯛ラバ釣りに出会ったのは、今から15年前の鳴門でした。当時、“鯛は海老で釣るもの”と相場が決まっていましたから、餌をつけないこの疑似餌釣りとの出会いは衝撃でした。しかも餌を食い千切る「餌取り」に邪魔をされることも少なく、本命だけを効率良く狙う漁具だったのです。漁師は鉛を打った「ビシマ糸」を用いて軽い疑似餌を海底に沈める手繰り釣りでした。われわれは細くて強いハイテク素材のPEライン（ポリエチレン製の釣糸）をリールで巻き取る釣り方を編み出し、広く提案しました。かくして「鯛ラバ」を落とし、ハンドルを巻くだけという簡単な操作で、誰もが鯛釣りを楽しむことができるようになったのです。真鯛の他にも、マハタやガシラ（カサゴ）、アコウ、ホウボウなどの根魚に加え、マゴチ、タチウオ、スズキ、ブリなどの高級魚まで釣れることがわかりました。

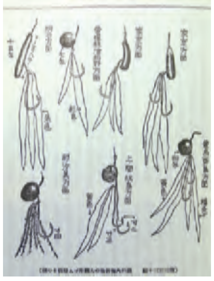
「鯛立て釣り用擬餌鈎」

この疑似餌による鯛釣りの発祥を辿る貴重な文献を見つけることができました。朝日新聞社の記者で釣魚欄を担当していた松崎明治氏が昭和17年に著した名著『釣技百科』（朝日新聞社）です。松崎氏によればこの疑似餌釣りの発祥地は、関アジ・関サバで知られる大分県の佐賀関でした。当時は「鯛立て釣り用擬餌鈎」と呼んでいたようで、昭和の初頭に関東の釣り師もこの疑似餌釣りに憧れていたことが次のように記されています（原文は旧仮名遣い）。

> 鯛擬餌の発祥については、各地でいろいろ先陣争いや元祖争いが喧伝されているが、現今の瀬戸内海の西南端大分県佐賀関漁師に使用され、各地の鯛仲間でよく話題になる海藻「ウミトラノヲ」については、大正三年八月発行の水産研究誌第九巻第八号に明治末期に創案された旨の興味ある報告が残されている。（中略）四、五年前（大正三年より）大分県北海部郡佐賀関町字宇須賀の漁夫、黒岩國松なるもの鯛一本釣の為、近海に出漁中、たまたま飼料（小蝦 コエビ）の欠乏を告げ、当惑の折から、応急手段として有り合わせの「ウミトラノヲ（方言はタコ藻）」を鈎に装餌し（佐賀関地方では小蝦を漁船の活間〈イケマ〉に蓄えるのに「ウミトラノヲ」等の海藻をともに入れ置く常習があった）釣りを試みたるに意外にも鯛の掛かり宜しく、小蝦とほとんど変りなき漁獲があった。以来黒岩氏はこの漁のことを秘密に行ってきたが、同人の漁獲高が常に他に優り、しかもいつも別段餌を購入する模様がないため、遂に彼は他人の飼料を窃取するにあらずとの嫌疑を受けることになった。また、同業者の間で彼の漁法を怪しんで、これを探知しようと努めるものがあり、いつとなく多数に伝搬し各自内密に使用し、彼の死後一般に発表するに至った（黒岩國松氏大正三年六月三日暴風雨の時近海出漁中遭難溺死）。

名著『釣技百科』（昭和17年10月 朝日新聞社発行）朝日新聞記者で釣魚欄を担当していた松崎明治さんが著したもの

さらに本誌125号で紹介した「テグス行商船」がこの釣りを瀬戸内海沿岸の各漁港や和歌山の加太へ伝え、そこから雑賀の漁師が東海から関東まで伝播したのです。

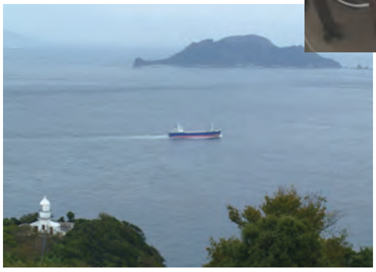

「鯛立て釣り用擬餌鈎」
当時はこんな擬似餌が使われていた（釣技百科より）

黒岩國松氏の足跡を辿って

この本を貪り読み、明治時代にカブラに海藻をつけ、疑似餌でマダイを釣った黒岩國松名人の足跡を訪ね、佐賀関を訪れました。佐賀関漁協に伺い、地元で名人と呼ばれる鯛の一本釣り漁師を紹介してもらう機会を頂いたのです。黒岩國松さんのことを伺うと「その名前は親父から聞いたことがある。かなりの名人だった」といいます。佐賀関は江戸時代より真鯛の好漁場として名高く、早い潮流を利用して、活魚を大阪の雑魚場に卸したことでも有名です。

佐賀関大分支所には、当時の「関の一本釣り和船」を復元した小舟が展示されていました（写真）。黒岩國松名人もこんな小舟で漁場まで漕ぎ出したと思いますが、佐賀関灯台沖は轟々と潮が流れる海域です。一度、海が荒れれば、命がけの操業だったことが分かります。かくして一本釣り漁師が編み出した和製ルアー釣りは、海を隔てた韓国でも大きなブームになりつつあります。釣りは日本が誇る貴重な文化です。一本釣り漁師の創意工夫から生まれた日本の釣り文化、釣魚料理など、関西には埋もれた文化資源がまだまだ残されています。

轟々と激流が流れる佐賀関に漕ぎ出した当時の舟
命懸けであったことがわかる


佐賀関灯台の上部から激流の高島を遠望する

楽しむ 学ぶ 語り合う
インフォメーション

インターナショナル和食フォーラム
～ 関西・大阪文化力会議2017 ～

**ユネスコ無形文化遺産に登録され、世界的な広がりを見せる「和食」。
その継承・普及に向け、さまざまな観点から専門家の意見を伺い、世界に発信します。**

2017年 4月17日（月）14:00～18:00　入場無料

▶ **大阪国際会議場**［10階会議室］
（京阪電車「中之島駅」下車すぐ）

基調講演
熊倉功夫（和食文化国民会議 会長）
ダリア カワスミオヴァ（日本料理店「雅」経営）
松澤佑次（住友病院院長）

パネルディスカッション
池田香織（医学博士）
熊倉功夫（和食文化国民会議 会長）
後藤加寿子（和食文化国民会議 顧問）
満田健児（懐石料理「とよなか桜会」）
モーリス グレッグ（龍谷大学農学部 食と農の総合研究所研究員）
佐々木洋三（関西・大阪21世紀協会 専務理事）

落語
桂 米團治

講評
石毛直道（国立民族学博物館名誉教授・元館長）

食博紹介
藤尾政弘（（株）フジオフードシステム代表取締役社長）

※登壇者等は予告なく変更する場合があります。

主 催：関西・大阪21世紀協会

参加お申し込み・お問い合わせ　関西・大阪21世紀協会　☎06－7507－2006　FAX 06－7507－5945
E-mail bunkaryoku@osaka21.or.jp

第9回「'17食博覧会・大阪」

主 催：食博覧会実行委員会、大阪外食産業協会、関西・大阪21世紀協会

ゴールデンウィークは、日本最大級の「食」のイベントへ！

4年に一度の「食博」が、いよいよ開催されます。「日本の祭り 日本の味くらべ」をテーマに、全国のご当地グルメをはじめ、世界の料理、スイーツ、お酒が勢揃い。初企画の「北前船寄港地ゾーン」では、青森県のねぶた祭りなど、東北地方のお祭り装飾も間近で楽しめます！

日本の祭り
日本の味くらべ

2017年 4月28日（金）～5月7日（日）
11:00～20:00（最終日は19:00まで）

▶ **インテックス大阪**［大阪国際見本市会場］
（最寄り駅：地下鉄「コスモスクエア駅」またはニュートラム「トレードセンター前駅」「中ふ頭駅」）

入場料
大　人／前売1,600円（当日2,200円）
子ども／前売　800円（当日1,100円）

チケットぴあ、セブン・イレブン、サークルK・サンクス、ローソン、ファミリーマート、各プレイガイドにて前売入場券発売中。

詳細はホームページで！　食博覧会2017　検索

関西・大阪21世紀協会賛助会員 入会のお願い
関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会　費（何口からでも結構です）
■法人会員 1口につき年会費10万円
■個人会員 1口につき年会費1万円

特　典
1.協会が発行する刊行物の配布
2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ （公財）関西・大阪21世紀協会　総務部

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会
ホームページ　http://www.osaka21.or.jp
発　行　日／平成29年3月31日
編集・発行／公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
〒530-6691 大阪市北区中之島6丁目2番27号 中之島センタービル29階　TEL.(06)7507-2001 FAX.(06)7507-5945
発　行　人／佐々木洋三　編集協力／株式会社インサイト　印刷／株式会社NPCコーポレーション
本誌は再生紙を使用しています。